

緩山河

第39号

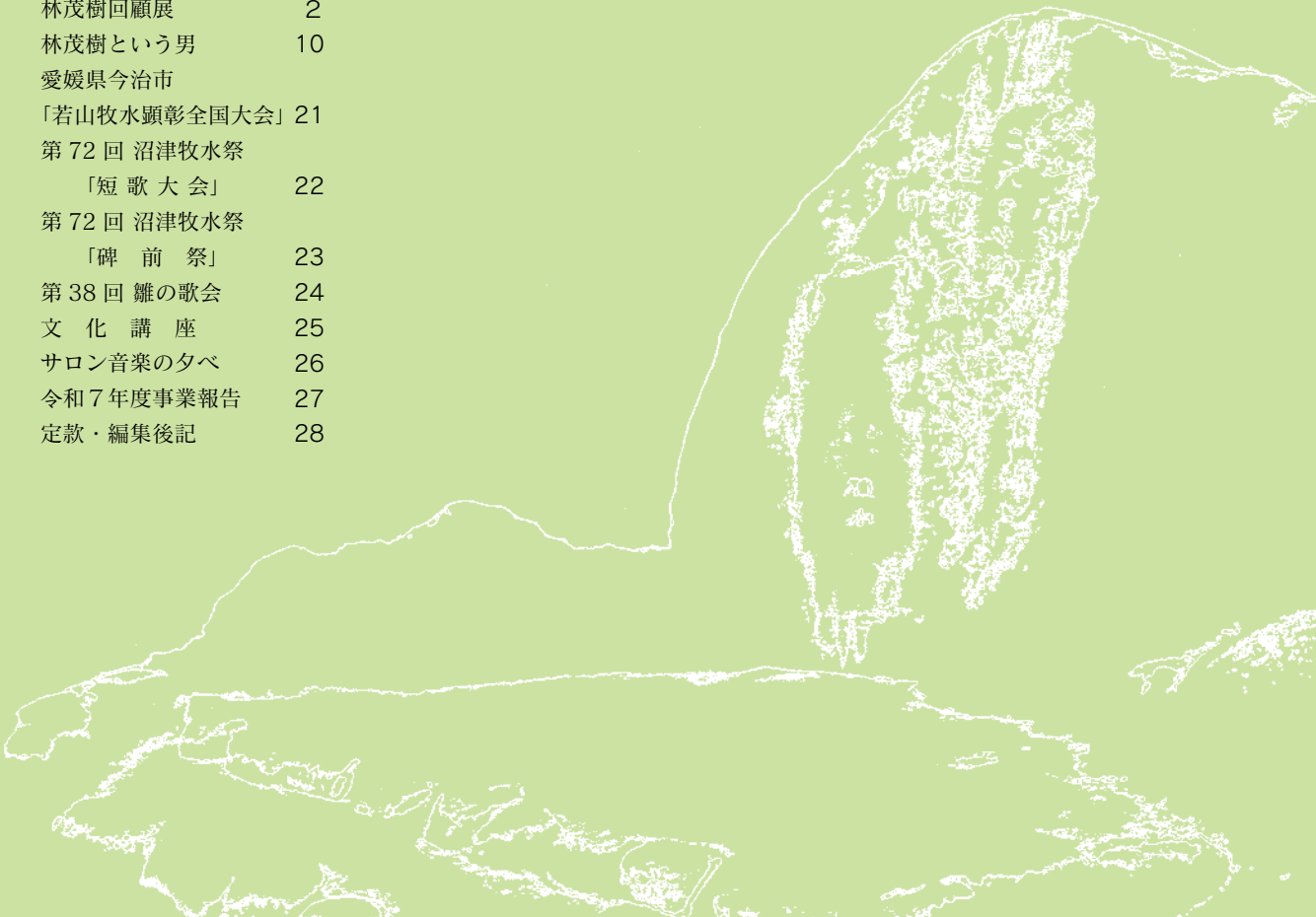
令和8年5月25日

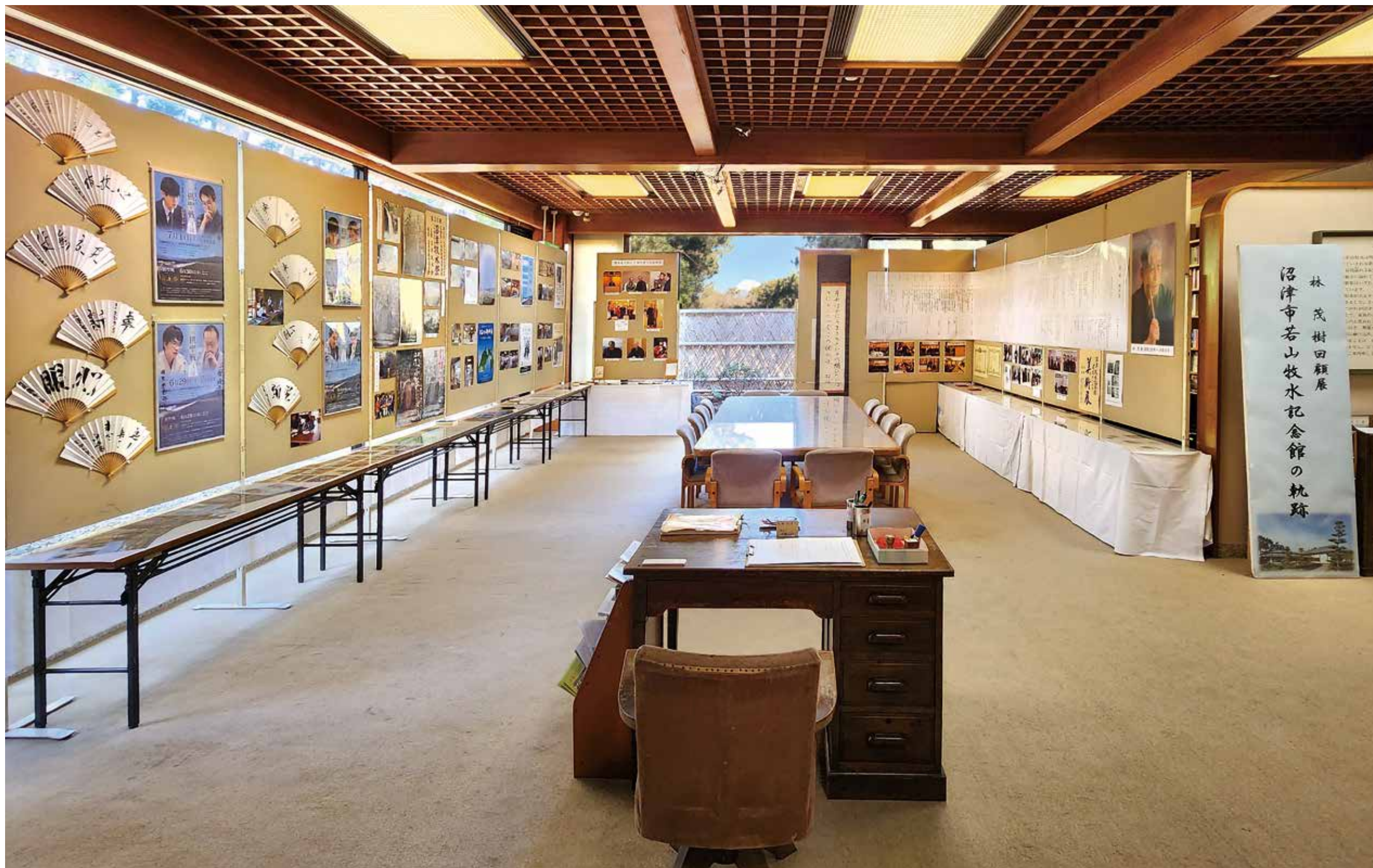
発行

公益社団法人沼津牧水会

目次

林茂樹回顧展	2
林茂樹という男	10
愛媛県今治市	
「若山牧水顕彰全国大会」	21
第72回 沼津牧水祭	
「短歌大会」	22
第72回 沼津牧水祭	
「碑前祭」	23
第38回 籬の歌会	24
文化講座	25
サロン音楽の夕べ	26
令和7年度事業報告	27
定款・編集後記	28





「林 茂樹 回顧展 沼津市 若山牧水記念館の軌跡」の展示全景







牧水をとおして知り合った先生方



佐佐木 幸綱 先生



馬場 あき子 先生



玉城 敬 先生



左から、石川謙治郎氏
小島ゆかり先生 林茂樹
柴本京子先生
米川千富子先生



伊藤 一彦 先生



池内 紀 先生



大下一真 先生



黒田 杏子 先生

林茂樹師と牧水記念館

共に歩んだ足跡たどり企画展

沼津牧水会（金子安夫理事長）と市教
委は、林茂樹回顧展
「沼津市若山牧水記
念館の軌跡」を15日
まで千本郷林の同記
念館ラウンジで開い
ている。

宮崎県生まれの旅
の歌人、若山牧水は
大正9年（1920）
に東京から当時の楊
原村上香貫に転居。
同13年（1924）、
千本松原近くに移り
住むと、同14年（19
25）、市道に新居
を構え、「終の棲家」
としたが、昭和3年
（1928）、44歳で
他界。千本浜道の浄
土宗千本山乗運寺に
埋葬され、翌年には
全国第一号の牧水歌
碑「幾山河」が千本
松原に建立された。
戦後間もなく、牧
水を顕彰する会が組
織されると、「沼津
牧水祭」として短歌
大会、碑前祭が開か
れるようになった。
さらに関係者の間か
ら「牧水記念館」開
設を希望する声があ

がり、1981年
（昭和56）に「沼津
牧水記念館建設発起
人会」が設立され、
76年（同51）から任
意組織の沼津牧水会
会長を務めていたが、
運寺住職の林茂樹師
が代表に就いた。



沼津牧水祭碑前祭で全国第一号の牧水歌碑「幾山河」に
献酒を行う林師＝千本浜公園で（2021年10月）

法人沼津牧水会が設
立され、林師が理事
長に就任。同会に市
から館の管理・運営
が委託された。
牧水会は2012
年（平成24）4月1
日、制度変更に伴い
公益社団法人となり
林師が引き続き理事
長を務めていたが、
一昨年2月5日、病
気のため、現職のま
ま満85歳で逝去。理
事の金子氏が理事長
を引き継いだ。

樹回顧展」。
同展では、林師の
生涯からの歩みが年
表で示され、牧水の
顕彰だけでなく、宗
門、公職、教育関係
など各分野にわたっ
て幅広く足跡を残し
た様子をつうかがい
知ることができると
している。



右側の写真は林師と厚情のあった人達のポートレート、
正面は企画展関係の資料＝千本郷林の牧水記念館で

玉城徹、佐佐木幸綱
池内紀各氏らのポー
トレート。牧水の壽
を取り上げた「若山
喜志子展」に始まる
企画展のポスターや
資料、企画展に合わ
せて製作した書籍な
どは、その体裁の一
つ一つに林師のこだ
わりを感じさせる。

記念館が大盤解説
の会場になるなど将
棋の棋聖戦で林師は
沼津対局開催実行委
員会委員長を務め、
立食式が通常だとい
う対局前後祭では3
000人余の出席者が
テーブルに着くとい
うコーディネートを
行い、対局に臨んだ
棋士達を感激させた
が、人脈の広さや果
敢な行動力で「沼津
の棋聖戦」に多大な
貢献をした。
企画展では、棋士
達のサイン入り棋聖
戦ポスターや扇子も
展示されている。

このほか、牧水会
では記念館を活用し
て、歌会や短歌講座
開催による短詩型文
学の振興、古楽をは
じめとしたコンサー
ト開催など芸術文化
の進展に寄与してい
る。

開館時間は午前9
時から午後5時、最
終入館は4時半。月
曜休館。
ラウンジの回顧展
は入場無料。（常設
展は有料）
問い合わせは同記
念館（電話9621
0424）。

林 茂樹という男

沼津牧水会会員 長澤靖夫



林茂樹前理事長と筆者(平成22年)

はじめに

私と林茂樹君との関わりは、高等学校の同

期生としての関係、静岡県教育委員会、沼津市教育委員会、学校法人三島学園知徳高校、公益財団法人復康会そして公益社団法人沼津牧水会での関係など数多くの交わりがあった。先般、事務局から、林君を偲ぶ稿を依頼された時、沼津牧水会理事長と理事である私との関係を書き連ねても、牧水会会員の方々は、周知の事ばかりで欠伸の出るものとなってしまうのでは無いかと危惧した。牧水会の会報ではあるが、敢えて彼の知られざる側面を私との関わりの中で語ることの方が、より彼の生き様を知ってもらえるのではないかと考え、県教育委員会での関わりを中心に、思いつくまま筆を進めることとした。

なお、文中存命の方はイニシャルで表記させていただいた。

本格的な出会い

梅雨の最盛期ジメジメした日であった。そろそろ風呂に入って寝ようかなと思いい、浴室に向かいかけた。ちょうどその時、一本の電

話がかかってきた。電話に出てみると、小・中・高校通じて最も親しく交遊のあったK・S君からであった。今、焼き鳥屋の喜平で、高校の同級生仲間達が集まって飲んでいる。同級生の近況話の中で、長澤が今、沼津に戻って来ているよと言ったら、すぐ来るように電話しろと言っているので掛けたとのこと。「来られるか」と言うので、時刻を確認したら十時半過ぎであった。

私は、その年の春から、沼津西高等学校の数学の教師として勤務していた。その通勤手段が、ヤマハバイク百二十五であり、しかも下戸(びこ)の中の下戸でもあった為、夜間の外出には全く支障が無かった。その様なことから、二つ返事ですぐ行くこと返答した。およそ十分程で焼き鳥屋喜平に着いた。そこには、五、六人の高校時代の友人達が氣勢よく盃を酌み交わしていた。その同期生のほとんどが、高校時代親しく付き合っていた友人達であったが、ただ一人名前は知っていたが高校三年間、一言も話をした事もない同期生がいた。その同期生が林茂樹君であった。彼とは、クラスも選択科目の履修も、そして部活動でも共有する場が無かった。従って、自然発生的に彼との交流が生じることはなかった。しかし、高校時代の彼は、その存在感が圧倒的で、私

の友人達を通して、私の耳に届いており、既に私の中には、様々な情報が蓄積されていた。その様なことから、初めての会話も全く違和感のない状態で交わすことができた。しかもその交わした内容のほとんどを今でも明瞭に思い出すことができる。私のこれまでの教育に係る人生を振り返ってみた時、私の歩んだ教育の原点がその時の会話(議論)では無かったかと思っている。そして、この日を境に六十数年に及ぶ、長きにわたる彼との深き親交が始まることとなった。

彼は元々乗運寺の住職であった父親が「ルンビニ幼稚園」を経営していた関係から、教育について造詣があり、私が教育の場に身を置いていることから、必然的に教育に係る様々な問題が会話の中心となった。しかしながらその時、論じあつたいくつかの諸課題が、後に彼と共に過ごした七年間の職場の中で、静岡県高等学校教育の改革の時には激論を交わしながらも協力し取り組むことになること、この日予想だにしなかった。

その後、暫くの期間、私が清水東高校や県教育研修所へ異動となり、沼津を離れていた関係もあり、同期会等で年に何回か会う程度であった。しかし、ある時期を境にして、頻りに会い交流を深めることが常態化した。

静岡県教育委員会 その一

昭和六十年四月、私は、静岡県教育委員会高校教育課企画担当主席指導主事として、任命を受け赴任した。着任して数日経った頃、高校教育課の部屋の入口で「やあやあ！こんにちは」と大きな声で一人の男性が入ってきた。私はその時、細かな統計的作業をしていて一拍遅れて声の主を見た。多くの課員がその声に驚いてか一斉に入口に顔を向けていた。その声の主こそ林君であった。私の席まで来たところで、「今日はどうしたの？」と聞いたら、「やつさん(その頃は私のことをそう呼ぶようになっていた)が県庁勤務になったから挨拶に来た」と言う。そう言えば、彼は、知事部局の学事課の私学審議会の委員をしていると聞いていたので、「今日は、学事課の関係？」と言うと、「そうだ」と言い、話し合いの中で、一緒に帰る約束をした。

私は以前県教育研修所(三島駅北口から徒歩五分程)に勤務していた関係から、そこに駐車させてもらい、静岡・三島駅間新幹線通勤であった。彼は来る時、沼津駅から東海道線で来たようだったが、乗運寺まで送るのでと言うことで、私に合わせた帰路にした。それ以降、彼が静岡での業務があつた時は、新幹

線で一緒に帰ることが常態化した。その日から六か月間程、月一回程度であつたが、十月からは、月二、三回と激増した。多い週は二、三回の時もあった。

平成元年九月のある日、いつもの様に高校教育課に現れた。学事課の仕事があるとは聞いていなかったもので、それを問うと、「いや、今日は県教育委員会の事で来たと言う。そこで、更に問うと、「この十月から静岡県教育委員会の教育委員に委嘱された」とのこと。私はこれまで、彼が高校教育課に来た時、いつも短時間の来課であつたことから、私は自席に座り、彼は立ったままでの会話であつた。しかし、この時、半分は冗談混じりではあるが、その場でスクツと立ち上がり、「これからは、私の上司になります。よろしくお願いします」と迎えた。周りに居た課員達もそれを聞き、それぞれが挨拶を交わした。その日は、県教育委員の任命の日でもあつたが、前委員長(沼津港に本社を置く羽野水産社長羽野重雄氏)との事務引き継ぎもあり、三人で帰路についた。新幹線三島駅までの約一時間、対面の四人がけの座席が確保でき、様々な会話が交わされた。しかし、その会話の大半に私は蚊帳の外におかれた。

羽野氏が以前、チベットの奥地まで出向き、

竹の板にサンスクリット語で書かれた、仏教の原典について調べ行った時の話に及んだ。何とすごい勉強家だと、初めは感心して聞いていた。そのうち、仏教の奥義とも言える話に及ぶと、私の頭は混乱し理解不能に陥った。しかし、驚くことに、林君はその話に即座に対応し、意見を述べたり質問を投げかけたりした。仏門に身を置くから当然だと思いつつも、その学識の深さには驚嘆させられた。この一時間程度、林君を通じて知り合うことが出来た羽野氏には、後の沼津市における県内初の公立中高一貫校の誕生に大きく尽力いただいた事も、この林君を通しての出会いがあったからである。

静岡県教育委員会 その二

当時の県教育委員会の委員は四人で構成され、その任期は四年を二回計八年で、委員長は就任から四年目毎に務めることが通例であった。これまで委員の年齢は五十代以上で、林君の様な十数歳も若い委員は稀有であった。それ故他の委員から静岡県の教育に新風を吹き込むことが期待された。先ず彼が最初に取り組みんだのは、ベルリンの壁の崩壊である。これまで委員になる前、私と二人だけの時は聞いていたが、高校教育課を訪れた折、べ

ルリンの壁について一言も述べたことはなかった。このことは、公の場においては、明確な仕分けが、意識として確立されていたのではなからうか。

県教育委員会事務担当各課は、東南西三方の窓を囲むコの字型の大きな空間を、書架などで区切つて各科に割り与えられていた。このことは大変合理的で、課の再編成や各課の職員の増減に応じて、それぞれ課の領域が書架等を移動させるだけでことたりる。西側の領域は、高校教育課、義務教育課、特殊教育課、社会教育課に与えられていた。この四課に限らず、他の課との境は腰高のスチール製の書架で区切られていて、椅子から立ち上がると、隣の課が見通せる状態であった。しかし、高校教育課と義務教育課は隣接していたが、その境は、天井まで届きそうな状態で書庫が置かれており、隣の課を見通すことが出来ない状況であった。

彼が教育委員に就任して数週間経つた頃、私は庄田武課長（後の県教育長）に呼ばれた。課長席に向くと、義務教育課との二課による中等教育の充実を図る検討委員会の企画案を作るようにとの指示であった。その際、「あの『ベルリンの壁』もなんとかしなくてはな」と言われ、「ははあん、新委員として動き出した

な！」と思った。

彼と初めて議論した焼き鳥屋での論点の一つに中等教育の充実、すなわち中学校と高等学校の連携強化があった。あれから二十数年経ても、その教育思想は失われること無く、いや更に深化していることに痛感した。早速二課による検討委員会が設置された。委員には両課の主席指導主事を中心にそれぞれの課から四、五名が任命された。会議は、月一、二回程度開催した。協議内容は多岐に渡つた。丁度この時期戦後第二のベビーブームが到来しており、中高間の課題も多くあり、適時性のある会議となつた。主な検討内容は、私が所管している中学卒業生の受け入れ態勢。公私立協議会で二対一受け入れ枠規定が定められているので、それによって十学区の受け入れ定員を定めていくことになるが、高等学校には、様々な学科があり、割り振るのは大変な作業を要する。これまで高等学校側の都合に合わせて決めてきたきらいがあった。

検討委員会ではそれらの点について、中学校側はかなり不満が蓄積されていたと感じた。また、学科改変や通学区、入試制度等々様々な諸課題が浮き彫りになった。当初は互いにぎこちない意見の交換であった。それを感じた林委員は、彼特有の人間関係の醸成力を高

める方法(この方法はここで示さなくても誰もが周知していることと思うので割愛を一、二度用いた。その結果、ざつくばらんに意見を言い合う雰囲気生まれ、互いの課題や問題点を忌憚なく討論することが出来るようになり、今までそれぞれが抱える悩みを少しでも改善すべく様々な方法が提案された。

中高教職員の三年間の人事交流研修や入試制度等々、県が進める施策には、規則改正や知事部局の財政課の認定も必要であり、協議し結論を得たからすぐ実施されると言う事ではないが、それぞれの課の担当者の努力により、彼の在任中にはほぼ実現化した。なお蛇足になるうが、ベルリンの壁は、課長がつぶやいた日から数日で崩壊した。

静岡県教育委員会 その三

彼が取り組んだ第二の点は、県教育委員会の機能そのものに係わる組織の在り方の改善である。これまで教育委員会は、各課事務局担当者が作成した施策案を審議し決定する事が主たる事であつて、その提案された施策が多少の意見が付加されても否決されたことは、私の知る限り無かつた。あえて悪く言えば、お墨付きを与えるだけの委員会と言えなくも無かつた。考えてみれば当然のことで、全て

の教育委員がこれまで教育現場に関わつておらず、事務局施策案を追認せざるを得なかつた。それらの状況を彼はいち早く感じ取り、それを打破すべく教育委員会の場に置いて提案した。(勿論私は教育委員会に出席してないのでこの事は帰りの新幹線で聞き及んだことである)その提案とは、現教育委員が充分に教育現場の実態を把握していないことを痛感した。そこで教育委員一人に対して事務局職員五、六名が一つのグループを作り教育の様々な現代的話題を論じ合うと言うものである。その話し合う場合も、県庁内会議室だけでなく、児童生徒あるいは教職員が実働している施設で実施する方式をとつた。例えば、春野町の高校生集団宿泊訓練施設「はるの山の村」、当時三島にあつた「教育研修所」、焼津「青少年の家」あるいは各種の学校などで実施した。

研修は、先ず全員で施設見学をした後、四グループに別れ、グループごとテーマを決め、数時間議論を重ね、その後全体でそれぞれのグループが討議内容を発表し、それを元に全体協議を行った。彼はその会議において、私との二人だけでの会話の中では、かなり具体的に話合っている。しかし、会議では多くの意見を積極的に述べるが、決して細

かな具体的指示的ことは敢えて控え、基本的そのあり方を発言していた。このことは事務局職員に工夫させる余地を残すことを心掛けていたようだ。また、その一方、随所に感じたことは、他の教育委員の教育資質向上も考へての発言であつたと感じていた。これらの一連の会議等の結果、事務局職員と教育委員の距離が縮まり、教育委員会の一体感が生じて来たことは確かなことである。

静岡県教育委員会 その四

私が教育委員会勤務七年も終わる頃には、私が最初配置された課の庄田武課長が三年前から教育長となつていた。その庄田教育長は六十歳を迎えており、その年度末で退職となることは周知のことであつた。これまでの教育長は、一般の教職員と同様六十歳になつた年度末退任する事が常であつた。しかし、林委員は、教育長は特別職なのでその規定に従うことはないと言張した。というのも、庄田教育長は林委員を高く評価しており、彼が主張する様々な教育課題の実現化に向けた教育施策を推進してきた。一方林委員も庄田教育長の文化やスポーツあるいは青少年を含めた社会教育と幅広く取り組む姿勢を高く評価していた。庄田教育長は他の委員には委員付で

対応していたが、林委員だけには、林さん、林さんと言っており、彼には特別親しみを感じていたようだ(教育委員の会議の場においては定かでないが)。いわゆる馬が合う間柄であった。そのようなことから、統投してほしいとの考えがあり、本人に何度か言っていたようだが、その都度辞退していたようだ。

年度末人事も終盤を迎えた頃、彼は動いた。教育長の任命は知事なので、先ず知事部局に働きかけて了解をとったようだ。後は、庄田教育長に首を縦に振ってもらうことであつた。それも数日内に行わなければならない。しかし教育長がたまたま福井県か富山県かに所用で主張中。よしそれならばと、彼は単身日帰りで、教育長の出張先まで出かけて、膝を突き合わせて説得したようだ。わざわざ時間を割いての説得に、庄田教育長も承諾をせざるを得なかったのではないか。

その時の状況を、私は庄田教育長から帰庁後伺った。ただその時、私にも大きな付録が伴ってしまった。知事に呼ばれ帰宅後すぐに、私は教育長室に呼ばれた。この年度末の人事で、私は下田市の高校に転出する事が、内々決まっていた。現教育委員会では、在籍八年間に高校教育課、社会教育課、総務課、生涯学習課と放浪していたが、その中でも一番

在籍が長かった高校教育課では企画担当であつた。当時は戦後第二のベビーブーム期の子供たちが高校進学する只中であつたが、数年後には、大幅に減少する事が予想されており、急減期の県公立高校の統廃合計画も策定してあつた。下田市内の二校の統廃合も含まれており、それを進めるため、特に中でも一番統廃合が困難とされていた下田市内の高校への異動と承知していた。ところが、庄田教育長から、想像だにしない言葉が発せられた。

「今、知事に呼ばれて行ったら、来年度も教育長を務めるようにとのこと。林さんからも強く求められていたので、わかりましたと返事してきた。ついては、長澤さんが年度末、高校への異動となっているが、もう一年、私と一緒にやって欲しい」と言われた。教育長から人事異動に関しては、依頼でなく、命令と受け止め承諾せざるを得なかった。林委員が強く求めた教育長統投が、私の人事にまで影響受ける結果となつてしまった。林君に抗議混じりの愚痴を言ったら、やっさんも教育長統投に強く賛成していたらう。いいじゃないかと躰たがされてしまった。高校教員としての事務局勤務は長くても六、七年だが、八年間勤務することとなった。しかし、このことは、後に意外な結果が待ち受けていた。

八月中旬頃だったと記憶しているが、突然教育長室に呼ばれた。伺うと、「先程知事に呼ばれて行ったら、副知事に任命するので就任するようにと言われた。ついては、一緒に一年間やろうと約束したのに、教育委員会を離れることになった。そこで三月末の異動先は長澤さんの希望通り次期教育長に伝えるので、どこが良いか」と聞かれた。咄ときに、私は教員者としての出発点であつた、沼津西高等学校と答えておいた。そして、時は流れ年を越した二月下旬頃、教育研修所長から教育長に急遽赴任した、大野忠教育長に呼ばれた。用件は異動の打診であつた。自宅からさらに遠くなるが、中遠の進学校を考えているがよろしいか?との事であつた。多分知事の出身高校だと感じた。その時ふと、前庄田教育長から半年ほど前の経緯が、多忙な時を過ごす庄田副知事は失念してしまつたのかと思ひ、大野教育長に、結構ですが決定する前に、副知事にお伝え頂けませんか。教育長は、不思議そうな顔をしながらもわかりました、とのこととその場は終わった。

数日後、再び教育長に呼ばれ、伺うと「長澤さん、副知事に叱られてしまったよ」と言つた。どうやら当時の経緯を聞かれたようで、希望する沼津西高等学校にしましょうと言つ

てくだった。何処からの情報か、私は一切異動に関しては、林君(当時は二回目の教育委員長)に言ったことはないが、その情報を得たようだ。母校愛の強い林君は、沼津西高等学校から沼津東高等学校に変更するよう強く教育長に何度も求めたが一切聞き入れてもらえなかった。この事は林君から聞き及び、あんなに教育長が頑固とはと、嘆き節を聞かされた。私も教育長も、何故沼津西高等学校に頑なに固執したかは理由があった。私は高校教育課企画担当時、高等学校の特色化多様化を進めるため、高等学校改革計画を作成した。その中には、単位制高校や国際高校など

何本かの柱があった。その内の一つの柱が県立高校における女子校の共学化である。当時、数年後を見据えて共学化を進める旨、各女子校の校長に伝えたと、女子校も特色ある学校の一つではないかといったことを始め、様々な理由を挙げ反対された。しかし、一番の反対理由は、伝統ある同窓会の了解を取ることの困難さではないかと感じた。当時の社会は、男女共同参画型社会を目指しており、多感な高校時代を分離して行うのは如何なものかとの考えが主流であった。しかし、私が共学化を進める最大の理由は、女子中学生の共学校への進路思考の変化であった。私の高

校時代は、クラス数名の女子しかいなかったが、計画を進めていた当時、これまで男子中心の高校において女子が半数近くまで占める状況が生じていた。

その結果、男子中学生は遠距離通学を選択せざるを得なかった。一方女子校は年々生徒の質が低下していった。ある女子校の十年間、内申書五教科を十点方式で調査したところ入学生全員の平均値が七点台後半であったが、年々低下していき、十年後には五点台まで落ち込んでいた。その様な状況から少しでも早く共学化を進める必要があったが、こちら側にも課題があった。統合によって共学化が解消する(例えば大仁高校を除いても十校ほどある学校の、男子トイレや体育時における女子更衣室の新増設。これらの設備費も高額に上ったが、どうやら予算化にも目処がついた。従って、沼津西高等学校を私自身の手で共学化すれば、他校も追従してくるものと判断した。林君にはこれらの経緯を十分に話し、しかも、あの若かりし頃の、焼き鳥屋での会話以来ずっと持ち続けている林君の教育課題の一つではなかったのかと問うた。「わかった」と言って、それ以降二年間は、私の人事に関しては何も申すことは無かった。

それから二年間、沼津西高等学校の共学化

に向けて取り組んだが、同窓会の共学化反対に対し、林君も知人の海野佳子元同窓会長に側面から働きかけてくれた。その甲斐もあって共学化が決定した。その年度末、突然沼津東高等学校の織田校長が静岡市の教育長に招聘されることになった。林君は、それを受け、

もう共学化への移行も決定したのだからと言って、再び、私を後任にする様、県教育長に働きかけた。これまで、私は毎年の異動希望調査においては、先の沼津西高等学校希望以外、お任せします、で通して来た。したがって今回も静観の姿勢であった。教育委員会の外部にいと、事前にとの様な状況かは、内示まで全くわからない。そして内示を受けた。林君が精力的に動いていたのは承知していたので、多分沼津東高等学校への異動となるのではないかと想像していた。ところが、Y・S静岡高等学校長が県教育長に転出するのでその後任にとの内示であった。林君は静岡高等学校への異動では仕方がないか、とこの時は矛を取めた。しかし、私が定年退職を迎える年の一月中旬、沼津市役所の人事課長であったが、秘書課長であったか失念してしまつたが、静岡高等学校を突然訪れ、私の現住所を静岡市から沼津市に移すことを承諾して欲しいと、住所変更依頼書類を出した。どう言

う事かと思議に思つて問うと、三月議会の為の議案書は、この時期印刷屋に出さないと間に合わないの、と言う。更に問うと、教育長案件に住所も併記するが、その住所が静岡市でなく沼津市にしたいとのことであつた。それを聞いて、林君が動いたなど思つたと同時に、困つたことになつたと瞬時感じた。それと言うのも、退職後、ある県内の大学からオファーが有り、最終の受諾確定については、未だではあつたが、ほぼその方向で進んでいながらである。ただこの場で言うのも適切でないの、夜、林君に電話することとして、どうせ三月末には住所変更しなければならないので、数ヶ月早い、その時役所にわざわざ行かなくても思い、住所変更は依頼した。その夜、千代田の校長住宅に戻つてすぐ電話した。電話に出た彼にこの経緯を話すと、「もうこんなに早く」と言つてから、「市長に市の次期教育長の推薦をしていたが、まだ最終的に確約の返事を貰つていなかったの、もう少し経つたら確認し話そうと思つていた」と言う。そこで、件の大学招聘を話すと、「未だ最終的に契約した訳では無いだろう。私たちを辞退して沼津の教育文化の為に是非承諾して欲しい。しかも、やっさんに私からの最後のお願いだと思つて引き受けて欲しい」。い

ろいろやり取りする中、最後の願いを最終的に承諾する事とした(実際は最後のお願いは無かつたが)。静岡高校勤務時代は、月一、二回会うぐらいに激減したが、市教育委員会に勤務してからは、県教育委員会時代と同様の状況に戻つた。市教育委員会では文化の振興の観点から、林君と当時のK文化振興課長の二人からの提案で、沼津文学祭を実施することとした。元々沼津に所縁のある文人墨客が多くおり、第一回は若山牧水とした。林君には、実行委員をお願いし、その中心的推進役として、また様々な意見のまとめ役として活動してもらつた。私が教育長退任後も引き続きその役割を担つてくれたようだ。

市長選 その一

教育長退任後、暫くしてとんでも無い事を依頼された。先に記したように「最後のお願い」が更に二乗となつて降りかかつた。その願いとは、市長選に立候補せよ、とのお達しであつた。私は、即座にその器量も資質も無いと言つて断つた。私自身がその任にあらずは勿論だが、我家の事情もあつた。私の祖父は、駿東郡議会議長や静岡村長を務め、その間政治に莫大な資金がいり、当時の政治は自己資金がなければ、関与できない時代であ

つたようだ。その為、長澤組と言う網元を縮少したり、御厨屋銀行と言う名の小さな銀行業もしていたが、それも大仁銀行(後に静岡銀行に併合)に売却せざる状況に追い込まれた。また、私の姻戚関係に、沼津市長を務めた長倉亘一と原精一がいた。両家とも沼津では名家と称せられていたが、政治に関わつた事により、没落してしまつた。原はミカン山三山売却して選挙戦を戦つたと伝え聞いている。この様な我が家の家訓もどきものを、切々と彼に話すと、彼は、よく解つたと言つて、それなら別の候補を探す様、協力を求められた。市長選出馬を断る際、それ以外の事なら何でも引き受けるからと言つた手前、二人で擁立に向けて取り組んだ。ある時は、沼津出身で彼の大学後輩の課長として省庁勤務のS・K氏に、東京まで赴き、ホテルのラウンジで交渉もした。彼を始め、数人にアタックしたが悉く辞退された。人選に困窮する中、私は彼に女性でもいいかと問うと、心当たりがあるかと問われ、一人の女性M・Sさんを挙げた。彼女は、税理事務所を経営している傍ら、市の設置している委員会の委員などを始め、幾つかの役員を務めており、私は何回か、彼女の発言や意見を聞く機会があつた。その際、非常に的確で斬新な秀でた思考の人物である

と強く感じた。ただまだ若く三十代後半だと思うので、と彼に言うのと、とにかく当たってみようとコンタクトした。しかしながら、彼女から、事務所経営だけでなく、小学生二人の子育て中であり、日々忙しさに追われ、全く余裕が無いのでと辞退された。

その様な行き先不透明な日々が一週間程続いていた時、彼から、「おい！見つけたぞ、出馬承諾してくれた」とやや興奮気味に電話があった。早速、教育研究者T氏に会っていろいろ話し合ってみたが候補として適格と判断した。彼も意欲的で今後の段取りまで話が進み、一段落かと思えた。しかし、林君から落胆というよりも憤った電話があった。T氏が立候補辞退して来たという。高校時代の友人たちに支援を求めたところ、協力して貰えそうも無いから、がその主な理由との事である。立候補締め切りまで一週間切っていたことや、彼の強い思いを感じていたので、やや慰めに近い気持ちで次回早めに取り組もうという事で、選挙戦の幕は降りた。

ところがその幕は降りていなかった。私に言えば大反対する事を熟知しているので、孤立無援の中で自らが立候補すると決断しその準備を進めていたようだ。この事は後に彼の口から直接聴いた事だが、市長選に立候補を

する事を、乗運寺の檀徒総代の方々に伝えたら、こそって、住職さんそれだけは是非やめてほしいと強く懇願され、掲げた旗を降ろさざるを得なかったと言う。彼が乗運寺駐車場内に選挙事務所のプレハブ小屋まで発注していたと聞き、彼の深い思いを痛感し、次回に最大限取り組もうと誓ったものである。

市長選 その二

次期市長選の半年ほど前、彼から会ってもらいたい人がいると電話があった。その日は、私も都合が良かったので、指定された居酒屋「車」に赴いた。沼津在住の大学同窓会があり、その流れであると四十代と思しき数名と林君が小上がりに居た。林君から一人一人紹介されたが、その中に、私も林君も共に高校時代の恩師、大沼栄穂先生の御息がいた。その大沼明穂君は沼津在住ではなく、東京でIT関連の事業を立ち上げ運営しているが、父君が高齢で独り住まいゆえ、毎週末沼していたので、沼津在住者の仲間入りをしていただけた。互いの紹介が終わるやいなや林君が、「大沼そっちのカウンターの方へ行つて、長澤さんと二人で話し合つてこい」と、彼に命じた。林君とは阿吽の呼吸で次期市長選についてのことと判断し、二人で席を

移動し三、四十分ほど話し合った。私が沼津の現状の認識について問うと、地元に住んでいる人達は、少しずつの変化には気が付きにくいですが、私のように間隔をおいて訪れると、衰退していくのを実感している。特に産業構造の変化に対応しきれないのでは無いか。以前は工場誘致などで活性化を計って来たが、現在はそれによる活性化は望めない。沼津の進むべき道は、観光立市だと思う。他市に無い観光資源が多くある。それを最大限、官民協力して取り組むことが重要である。そして、その具体的施策まで話が及んだ。彼は市政に対し意欲的でもあり、私も彼の主張を聞き、市政を委ねるには適任だと判断した。しかし、二人で立ち上げた事業はもう一人の者にある程度委ねることが出来るが、奥さんが大反対だという障壁があった。最終的に林君の強い要請で、その反対を押し切り出馬を決めた。

早速、林君は、戸田のS氏など多くの協力者を得て、事務所開設から選挙対策推進組織を構築した。推進母体の中心は大沼君の友人達とし、私達はそれらをバックアップする体制とした。その後、立候補、選挙戦に突入し、選挙戦中盤にはやや有利との情報も届き、一喜一憂の状態が続いた。

私は四十代の頃、東京女子医科大学附属病

院で脾臓の摘出手術を受け、月一回通院していた。その通院日診療待ちしている所へ、林君からの着信があった。電話に出るやいなや、「今何処にいる？」現状を伝えると、「すぐ来れないな。実は推進母体の友人達に仲間割れが生じており危険だ。ついてはあんたが委員長をする以外にない。そうするから」と言つて一方的に電話切つてしまった。蟻の一穴も見逃さない洞察力とそれに伴う決断力の凄さは、前々から感じていたので、反論もせず従つた。実際には、選挙戦も終盤であつたため、特別何をする事も無く選挙当日を迎えた。

その結果見事当選した。一番喜んだのは、当人より林君であつたと思う。彼は、苦勞の甲斐あつてか、感激のあまりか、涙腺が刺激された顔で、喜びを伝えてきた。彼を強面と評する人もいるが、それは表面的短絡的見方であつて、実際は心の奥深い裏の中に、涙腺にスイッチを入れる、心優しき装置が内在していると、数多くそのような場面に出会つた私は常に感じていた。

市長選 その後

かなりの大差をつけて、現職候補に勝利しお祭り気分も冷めやまない中、林君の提案で、施作検討の会を立ち上げた。メンバーは大沼

市長を含め五名の少人数で組織した。週に一、二回、乗運寺客殿で、おおよそ夜七時頃から行うこととした。何回か会を重ねる中、議論が伯仲し、連日連夜に及ぶこともあり、また日を超えたこともあつた。この様に外部における市長のバックアップ体制も整いつつあつたが、市庁舎内部においては、バックアップ体制どころか、市長が進めようとする施策に対し真つ向から抵抗し、思う様な市政を推進することが出来ない状況であつた。選挙の対抗馬が現職市長であつたため、市の幹部職員はほぼ全員が大沼市長誕生を快く思つていなかったから、当然と言えば当然のことでもあつた。そこで、林君は市長に対し、庁内で補佐できる特別職に、外部検討会の一員でもあるT氏を任用するよう進言した。大沼市長もそれを受けT氏を迎え入れた。しかし、多勢に無勢で思うようには進まなかつたようだ。それを顕著に感じたのは多食である。乗運寺での会議のおり、茶菓子を用意していただいていたが、それを次から次へと手を伸ばす姿を見て、フラストレーションが多食症を誘発したのでは無いかと思えた。居酒屋車での出会いから、一回りも二回りも太り、市長としての貫禄が出て来たと感じていたのは、浅薄な見方であると、その時思つた。彼から選挙前、

脳の一部が出血し入院したことがあると聴いていたので、その食べっぷりを見て、その影響で再発でもしたら大変だと心配していた。そのような彼の状態を、林君も感じていたようで、年の瀬も話まつた十二月、電話があつた。それはまさしく私が危惧していた市長の食欲のことであつた。やっさんの所から大沼の家は近いから出掛けて行つて嚴重に注意してくれないか。人前ではあまり言えないことなので、との依頼があり、私もそのつもりだつたので、休日を待ち、都合を聞き牛臥の自宅へ出かけた。部屋に入るとすぐ、説得の効果を考え、挨拶もそこそこに、直裁的に切り出した。自分は気が付いていないようだから、側から見ると大変異常に感じる。多食のこと、体型のこと等やや強圧的に戒めた。彼も神妙に聞き、最終的にこれから半年かけて十キロ減量するよう努力すると約束を交わした。年明け早々に会つた時、やや痩せて来たかなと感じ、安心していた所、三月末突然驚きの訃報が届いた。後で聞いた話だが、その日は休日だったので通常の仕事はなく、イベントでの挨拶だけがあり、平日より二時間ほど遅い十時頃迎えに行ったものが倒れているのを見つけたという。それから一時間程して逝去されたと知らされた。その時感じたのは、

もし平日なら二時間も前に倒れているのを発見でき、命を落とすことにならなかつたのではと休日であつたことを悔やんだ。

それから数日をおかず林君に会つた時、彼はしみじみと心のうちを吐露した。彼の死期を速めてしまつた一端は私にある。奥さんが選挙中沼津へ来ないくらい反対していたのは、市長という過密な仕事で、過去の病魔が再発する恐れを感じていたからではなかつたかな。それをもう少し奥さんや彼の主治医にあつて確認しておけば良かったと、しみじみ語りその思いやる気持ちだが、強烈に我が心に刺さつた。

三島学園知徳高校

林君は以前から学校法人三島学園の役員を勤めていたが、その間当時の理事長の資金不正流用が発覚し、正当性を主張する理事長側と争い裁判まで発展した。それらの経緯は、彼からも聞いていたが、全国的に週刊発行している「県政だより」にも連載で詳しく掲載されていたので、相手側の主張もある程度理解していた。十年近く続いた裁判で何度も証言台に立つたという林君側の主張が認められ、役員総辞職をし、新たな役員を選出する事となつた。その時、旧役員で林君側に付いた人

達から、理事長受託の強力な働きかけがあり、やむなく条件付きで受諾した。その条件とは、「林が役員の方を選ばせ、それを承認すること」であつた（この事は後に林君から聞いた事）。

林君はこれまで私学協会の理事も勤めており、私立学校経営の要は役員構成であるとの信念を持っていたようだ。私も市長選立候補辞退の時、それ以外なら何でも言つていたので、何らかの依頼があるだろうと覚悟はしていた。

そんな折、元副知事であつた柴順三郎氏から電話があつた。「長澤さんは、三島学園の役を引き受けたんだって?」「えっ」と言うと、林さんから電話があり、長澤さんも引き受けてくれたので、私にもお願いしたいと言われた。長澤さんが、引き受けたならいいかと思ひ、承諾したので宜しくとのことであつた。それから暫くして、林君から監事役を仰せつかつた。その時、柴さんのことを言うと、そんな事言つた覚えは無いよと惚けられた。

柴元副知事は私が県教育委員会にいる時、知事部局からの出向で教育委員会の財務課長や教育次長の職にあり、葦山の自宅から新幹線で通勤していた。私も同様の通勤であつたので、自然と向かい合わせの席で県庁迄一緒に通勤した。この状態は、柴さんが副知事に

就任して静岡市に転居する迄の間、四、五年続いた。丁度その頃、生涯学習の認識が高まり、静岡県も教育委員会に生涯学習課を設置し、私が初代の課長に就任した。県で行う事業のほぼ全てが、前年度予算化して当年度実施するので、生涯学習課には、殆ど事業費が計上されていなかった。そこで私は、新幹線の中で、教育次長の柴さんに、予備費から新たな事業に係る費用をお願いした。何件かお願いしたが全て対応していただき、大変ありがたかつた。庁内では限られた時間でしか次長とは話ができないが、静岡までの一時間は私の独占的貴重な一時間でもあつた。その様なことから私と柴氏との深い信頼関係を承知していた林君が、通常では考えられない元副知事に一高校役員を引き受けてもらうためと認識した。林君は、理事長就任にあたり、まず考えたのが教職員の意識改革であつた。その一つの方策が元副知事の登用であつた。教職員は役員に元副知事になつたことにより我が学校は他の学校とは違ふと言う誇りを感じさせようとしたのであろう。

また彼は前常任理事の亀山千鶴夫氏とは、正反対の学校経営を実践した。亀山氏は私が以前勤務していた教育研修所の上司でその手腕は十分承知していた。兎に角発想豊かで、

仕事が丁寧でしかも早い。その様なことから、本来校長や事務長が行うべき事務処理迄もしてしまう状態であった。この様な状況は教職員を育てる事にもならず、また不満を蓄積させることにもなっていた。そこで彼は、経営の核となることの指示以外全て校長や事務長を始め教職員それぞれの自主性に任せることとした。これによって、明らかに学校全体が活性化した。それを顕著に感じたのは、監事である私が監査のおり、かなり厳しくシビアに改善を指摘しても、県教育委員会の時の様に反論せず、同席している幹部職員に、指摘したことに対応する様命じた。この徹底した経営方針が、やがて地域の中でもその存在感を高めることとなっていた。彼は様々な組織の運営や経営に関わって来たが、その組織の携わり方が最善なのか感覚的に捉えることの出来る数少ない中の一人であったと感じている。

おわりに

これまで幾つかの場面で、彼と共に過ごして来たが、その全てを語ることは出来ず、ほんの一部について紹介したに過ぎない。それほど彼は私の人生に大きなものを与えてくれた。その根底にあるのは、互いの心の奥底に

ある絶対的な信頼感であると思っている。それを特に感じた時があった。それは前掲の知徳高校校長人事に係る時のことであった。知徳高校校長は歴代公立高校を退職した者の中からおよそ六、七年で交代している。未だ理事長に就任する前であったが、交代時期が来た様で、私に誰かいい人はいないか推薦してほしい依頼された。どの高校であつてもその時々によつて状況が異なる。荒れた学校から教職員生徒とも躍動感のある学校迄様々ある。校長には、その様な学校の状況に応じて手腕を発揮するタイプがあると長年の経験から感じていた。その時の知徳高校の現状から考え、W氏を推薦した。「そうか気が付かなかつた。彼なら適任だな。W氏は県教育委員会で特殊教育課長を務めたので知らない中では無かつたので、わかつた」と言つて交渉の役を仰せつかった。この様にその後の校長交代時期になると適任者を推薦して来た。その何人か推薦して来たが、ある交代期にS氏を挙げた。彼は名前も初めて聞く、どんな人物かと聞かれたので、簡単に紹介したら、わかつたすぐ交渉してほしいと言われた。本来なら自らの経営に大きく関わる人物を面接もせず即断で決めてしまったことに驚くと共に、私を絶対的に信頼してくれているのだなど、その時強く

感じた。

私と林君との共通の友達である高校同期の大谷栄次君がいた。ある時、三人でいた時、大谷君が「林も長澤も不思議だよな。何か難しい話で言い合つていたかと思うとその後ケロッとしている」と不思議そうに言われた。彼はその状況に何処で出会つたか定かでないが、私と林君の論争の本質を捉えていないからである。私達の話し合いは、事の本質のみで決して互いの人格を含むことは、一切無かつたからである。人格を含まずと言うことは、その根元に深い信頼関係が内在していたからだと思つている。また大谷君はその時こんなことも言つていた。「林は頑固だけど、長澤も意外と頑固だ。頑固同士がぶつかつても仲がいいのは、林の頑固さはハードで、長澤の頑固さはソフトだからかも知れない」当を得た発言であつたかどうかは判定に苦しむところであつた。その様な関係の彼と今生の別れとなつたことは寂しい限りである。

林君今どうしている？独りで寂しくしていないかね。もう直ぐそちらに行く。行つたらまた大いに楽しくデピートしよう。暫く待つていてほしい。

心からの友人やっさんより

第十四回 若山牧水顕彰全国大会 ——しまなみ・ゆめしま大会——に参加して



国大会が開かれた。

五月十七日(土)、七時二十六分発こだま七〇一号へ乗車。静岡でひかり五〇一号に乗り換え、一路岡山へ。出発から降っていた雨も西明石あたりから上がってきた様子。岡山からJR瀬戸大橋線特急しおかせ九号に乗り換え今治へ。初めて乗車した特急しおかせの車窓から瀬戸大橋を眺めながら、四国へ入る。

午後一時四十四分、今治駅に到着。駅前の食堂「三葉」で昼食。ホテルに荷物を置いた後、今治城の見学にむかうが、みんな移動で疲れてしまい、天守を下から見上げただけで終了する。夕食は、今治城から少し離れた「頼登」で瀬戸内の地魚料理を堪能する。

翌十八日(日)、みなと交流センター「はーばりー」で顕彰全国大会が開催された。この「はーばりー」は、船をモチーフにしたユニークな外観が特徴で、ガラス張りの開放的な空間からは、瀬戸内海の美しい景色を一望できる。百名以上の参加があり、午前九時、若山牧水しまなみ顕彰会丹下大輔会長の挨拶に続き、馬越健児事務局長の日程説明があった。

十時から伊藤一彦氏の司会で、大森静佳、土岐友浩両氏をパネリストに迎えて「牧水第六歌集『みなかみ』をとことん論じる——定型と韻律をめぐって——」と題してシンポジウムが行われた。伊藤、大森、土岐三氏が「みなかみ」を含めた牧水の歌集からそれぞれ十首を選び解説をしていた。十一時十分から土岐氏の司会により、大森、佐藤文香、山口遼也三氏をパネリストに迎え「短詩形の過去と未来——牧水・山頭火・放哉から考える——」と題したシンポジウムが行われた。

午後からは、岩城島クルージング。今治港から海上タクシーで岩城島まで向かう。岩城港から町並みを眺めながら三浦家墓所の長法寺、旧岩城郵便局を回り、上島町岩城郷土館となっている三浦邸を見学。中庭には昭和三十八年に建立された牧水「窓前の瀬戸はいっしか瀬となりぬ白き浪たちほととぎす啼く」と喜志子「わかき身に餘るうれひをつゝみもちていく日をこゝに宿りましけむ」の短歌を刻んだ歌碑があり、その歌碑を見ながら献杯。夕方からは宿泊先のホテル菊水今治で懇親会が催され、郷土料理に舌づつみをうって、第十四回若山牧水顕彰全国大会が終了した。

なお、今回の参加者は、金子安夫、原悦子、三宅芳則、山下数高、大島葉子の五名でした。

明治四十五年、父を亡くし地元坪谷に帰っていた牧水。家を継ぐべきか文学の道に進むべきか悩んだ末、文学の道を目指すことを決めた牧水は、上京する途中岩城島の三浦敏夫宅へ立ち寄ったのが大正二年五月十八日。それを記念して、四国初となる若山牧水顕彰全

第72回沼津牧水祭 短歌大会

十月五日(日)
午前十時三十分
沼津市立図書館
四階視聴覚ホール



第七十二回「沼津牧水祭・短歌大会」は、講師に『未来』編集発行人であり、歌集『椽と石垣』で、第二十九回若山牧水賞を受賞された大辻隆弘先生をお迎えして開催された。応募短歌は百九首、参加者は六十七人であった。午前は、大辻先生による「牧水の叙景」と題した講演があった。牧水の歌二十一首を選び、ご自身のお話も混ぜながら、優しく丁寧に解説された。

大辻先生は、二十三歳で歌を始め、牧水の初期の恋愛の歌が胸に響いたが、そのうちロマンチックな歌が苦手に思うようになった。しかし、晩年の自然詠の良さもわからなかつ

た。ところが、十年程前に牧水についての原稿を書くことになり、全歌集を二回読み、晩年の叙景の歌が心に染みるようになった。

特に『くろ土』あたりで牧水の一面白い所が開花し、自然の景色と自分の想いを一体化していく。独自のオノマトペを使い、自然を表現する感覚が鋭く繊細である。アララギも叙景の歌を大事にしているが、目の前に厳しい自然があり、その前に孤独な自分が立ち、自然と対峙している歌が典型となっている。ところが、牧水の叙景の良さは、ゆったりと動くような感じにある。牧水の歌はリズムが二句切れで、三句目以降は大きな叙景を詠っている。認識のプロセスが忠実に再現され、まるで牧水と同じ体験をしているかのように感じさせる。これが牧水のすごい所である。短歌は調べであり、ゆったりと言葉をはこぶことが大事と、締めくくられた。

午後は、参加者の出詠作品について講評と表彰式が行われた。最終的に直した歌を詠みあげるなど、一首一首丁寧に講評された。

大辻先生選の沼津牧水賞三首と出詠者による互選賞七首を紹介する。

沼津牧水賞一席

沼津市 永久保英敏

母逝きて感謝されたることのあり残る櫛

櫛を友にわたせば

沼津牧水賞二席 埼玉県本庄市 白藤巳玲

磨りたる燕のヒナが玄関の軒端の巢より声をつきだす

沼津牧水賞三席 静岡市清水区 伊藤 純

おまえ今どの風の中マイルスを聴いてから死ねと言いにし友よ

市長賞 札幌市 藤林正則

墓仕舞生家仕舞を終へて発つ車窓に音無き火花を見上ぐ

市議会議長賞 駿東郡清水町 前田鐵江

明朝体のやうに話してくれるから一語一語が心に届く

教育長賞 沼津市 高木友代

かぼちゃ切るかたさに負けた右肘の湿布二枚がねじれて並ぶ

商工会議所会頭賞 伊勢原市 山田ゆたか

汐引けば貝を拾ふ子波追ふ子歌人の足あとたどる浜辺に

観光協会会長賞 神戸市 今井 修

静かなる図書館のなか音立てずメロスは今日も走っているか

沼津朝日新聞社賞 沼津市 山田純子

石好きの夫と小二のひなちゃんはあれこれ手にとり石談義する

マルサン書店賞 駿東郡清水町 小馬晴美

戦死せし息子の分も生きるでなお前ら守ると言ひくれし祖父

第72回 沼津牧水祭

碑前祭・芝酒盛

十月十九日(日)午前十一時



第七十二回沼津牧水祭碑前祭・芝酒盛が千本浜公園牧水歌碑前で行われました。予報では雨でしたが、当日は僅かに小雨がばらついたものの、大勢の方に参加していただき無事に開催することができました。

頼重秀一沼津市長、奥村篤沼津市教育長の代理として金子昭人沼津市教育委員会教育次長、梶泰久沼津市議会議長をはじめとする来賓の皆様にご臨席をいただき、伊藤一彦若山牧水記念文学館館長、田原大三東京牧水会会長、伊藤輝和愛知牧水会顕彰会事務局長など、遠方からも多数ご参加いただきました。

金子安夫沼津牧水会理事長の開会の挨拶、来賓を代表し頼重市長のご祝辞、金子教育次長が奥村教育長のご祝辞を代読されました。

若山三郎沼津市若山牧水記念館館長が「幾山河」の歌碑へ献花、献酒を行い、挨拶がありました。

朱色の鮮やかな着物で花柳凜様が日本舞踊を披露され、松林の中に舞う一羽の蝶のような姿はとも美しく、静かな淡い余韻を残していくようでした。

次に、「中学生短歌コンクール」の表彰式が行われ、沼津市内十九校から一三五首の応募があり、特選十首に選ばれた中学生たちの短歌が一人一人読みあげられ温かい拍手の中心で表彰されました。その後、伊藤一彦文学館館長からご挨拶をいただき、中学生へ熱いお言葉を頂戴致しました。

高田紹代様による牧水の「沼津を詠んだ歌」の独唱、「牧水のうた」を歌う会の合唱の美

しい歌声が、松林に響き渡り、「碑前祭」の式典を終えました。

大きく「牧水」と書かれた酒樽が歌碑の前に登場し、頼重市長、金子教育次長、梶市議会議長、伊藤文学館館長、田原会長、若山館長による鏡開きとなりました。そして、梶市議会議長の乾杯の音頭で、「芝酒盛」の始まりです。

「桃中軒」のオリジナル弁当、「富士山餃子」、今年初参加の「ナザレ」の一口コロケなどを肴に「地酒」を酌み交わし、会場のあちらこちらで再会を喜びながら、和やかな談笑が始まりました。

再び登場した高田紹代様の牧水「酒の歌」の独唱、岳心流沼津愛吟国風会の詩吟、ぬまづ観光ボランティアガイドの合唱、沼津ハーモニカクラブ・千本ハーモニカクラブの合奏と楽しい集いとなりました。

最後は、裾野五竜太鼓保存会による威勢のいい太鼓が鳴り響き、お祭りは最高潮の盛り上がりの中、盛会のうちに幕を閉じました。四百五十人の皆様にご参加いただき、楽しいひとときの中、本年も無事に開催できましたこと、関係者一同厚く御礼申し上げます。

また、お忙しい中、お手伝いいただいた方々にもこの場を借りて重ねて御礼申し上げます。

第38回 籬の歌会

二月二十八日(土)
午後一時三十分
沼津市若山牧水
記念館ラウンジ



令和八年二月二十八日(土)、第三十八回「籬の歌会」が沼津市若山牧水記念館で開催された。講師は「西瓜」所属の江戸雪先生である。晴天の歌会となった。応募短歌は八十二首、参加者は五十三名だった。

湯山昌樹理事が、江戸雪先生について紹介し籬の歌会が始まった。

江戸先生は、牧水の短歌について、今の若者が使いたがる言葉を使い、若者にも響く歌で貴重である。是非若者に牧水や近代短歌に触れて欲しい。私は今までの短歌を大切にしつつ、世の中に短歌を広める意識を強く持つて新しいことに挑戦したいと力強く話された。

その後出席者の詠草を中心に講評が行われた。先生の選ばれた短歌十首について紹介する。

さよならとまたねのあわい小部屋には着く香っているヒヤシンス 高田 圭

すごく雰囲気のある歌。心情と場面をうまく合わせて作っている歌である。香りを「青」でなく「蒼」と使っているのがいい。

給食もカレーだったとひなちゃんはでもばあちゃんのはほしぶどう入り 後藤久枝

いいですね。ひなちゃんとおばあちゃんの関係が見えていい。読み手に想像させている。

鳶一羽山のかげより飛び出でて海のむかうの空へと消ゆる 榊原芳子

鳶のかっこよさがよく出ている。「飛び出でて」がちよっと気になる。語順を替えたりするなどもう少し工夫できるかと思う。

介護ホーム一緒に入居しようねと妹は言う繰り返す 古長谷達子

なんと切実な歌。妹さんの未来への不安が伝わる。リフレインがうまくきいている歌。

仏壇に祈りてをればしめやかに天井板のきしむ音する 飯泉千春

自分の心の思いが天井板がきしんでいるように感じている。思い入れをさらっと、重すぎないように歌っているのがいい。

雲を生むように石鹼泡立てて母を洗えばまた父をよぶ 数又みはる

すこい好きな歌。「雲を生むように」がすこくよい。また結句に展開がある。

ルゴールと母の日傘の浮かびくる福地医院の跡のじゅうずだま 川辺典代

上手に固有名詞を使っている。固有名詞から絵が浮かんでくる。言うことなしの歌。

つぎつぎと花弁は外へ開かれてもう秘密でも何でもなくて 三浦こうこ

肯定も否定もしていないところがいい。何の花か?と読み手に想像させる。

小春日の羽をやすめる干潟には水鳥うつらうつら水鳥 森崎洋子

「水鳥うつらうつら水鳥」がかがみになっているところがよくて、歌がうまい。情景がぱつとうかぶところもいい。

しらさが睦月の川に足をいれ首を伸ばして空をみている 住美賀子

うまい使い方をしているが、このままだと動詞が続きすぎている。結句で「青空の下で」など更なる展開ができるとなおいい。

先生は歌評の際に「これは私の好きな歌です」と多くの短歌に添えているのが非常に印象的だった。出詠者に寄り添っていただき、講評をいただけて、充実した歌会となった。

文化講座

書道講座

日時 令和7年4月～令和8年3月 毎月第3火曜日 午後(全10回)

講師 成田真洞氏



初心者のための短歌講座

日時 令和7年4月～令和8年2月

毎月 第2土曜日 午前(全10回)

講師 永久保英敏氏

牧水記念館短歌会

日時 令和7年4月～令和8年2月

毎月 第2土曜日 午後(全10回)

講師 永久保英敏氏



サロン音楽の夕べ

沼津市若山牧水記念館ラウンジ

古楽コンサートシリーズ42 ソプラノ、フルート、チェンバロの夕べ

日 時：令和7年11月16日(日) 午後6時45分

出 演：小見山香乃(ソプラノ)

杉山和香菜(ソプラノ)

大島 萌(フルート)

杉山佳代(チェンバロ)

来場者：36人



義太夫節演奏会「一谷嫩軍記」

日 時：令和7年11月23日(日) 午後7時

出 演：竹本千香(義太夫節 太夫)

鶴澤津賀花(義太夫節 三味線方)

来場者：23人



令和7年度事業報告

令和7年4月1日～令和8年3月31日

1 総会

第39回定時会員総会

日時:令和7年5月10日(土)午後3時～3時50分

会報 第38号 令和7年5月25日発行

館報 第75号 令和7年9月1日発行

第76号 令和8年3月15日発行

2 理事会

第1回(通算205回)理事会 令和7年4月15日(火) 午後6時～7時30分

第2回(通算206回)理事会 令和7年7月29日(火) 午後6時～6時45分

第3回(通算207回)理事会 令和7年12月16日(火) 午後6時～7時15分

第4回(通算208回)理事会 令和8年3月13日(金) 午後6時～7時20分

1 調査研究事業

- 若山牧水関係資料の収集
- 若山牧水顕彰しまなみ大会(主催:若山牧水しまなみ顕彰会)
日時:令和7年5月18日(日)午前9時30分
会場:愛媛県今治市 みなと交流センター「はーばりー」
内容:シンポジウム、岩城島クルージング、懇親会
参加者:金子安夫、原悦子、三宅芳則、山下数高、大島葉子
- 若山牧水記念文学館特別展「牧水43年の生涯
～没後100年の軌跡を辿る」へ資料貸出
会場:若山牧水記念文学館
開催期日:令和7年7月5日(土)～9月28日(日)
貸出資料:若山健海 履歴明細書、医師御免許鑑札願
デジタルデータ2点
開催期日:令和8年3月6日(金)～5月31日(日)
貸出資料:「中学文壇」M34.7.1号 表紙、作品掲載面、
「中学文壇」M34.8.1号 作品掲載面
「中学文壇」M34.9.15号 入賞者口絵 デジタルデータ4点
- 第75回 日向市の「牧水祭」へ祝電(主催:日向市、日向若山牧水顕彰会)
日時:令和7年9月17日(水)午前9時30分
会場:宮崎県日向市東郷町坪谷 若山牧水生家夫婦歌碑前及び
牧水公園「ふるさとの家」
- 塩尻短歌館企画展「歌人たちの詩心あふれるラブレター」へ資料貸出
開催期日:令和7年10月1日(水)～12月26日(金)
会場:塩尻短歌館
貸出資料:牧水書簡、牧水半切、喜志子色紙 5点
- 第69回 暮坂峠「牧水まつり」へ祝電(主催:牧水詩碑保存会)
日時:令和7年10月20日(月)午前11時
会場:群馬県吾妻郡中之条町 暮坂峠
- 第25回「百草園牧水歌碑祭」へ参加(主催:東京牧水会)
日時:令和7年10月26日(日)午前11時
会場:東京都日野市百草園 百草園 牧水歌碑前
参加者:金子安夫、石田牧郎、石田多嘉子、山下数高、大島葉子
- 第50回「裾野若山牧水祭」へ参加(主催:鈴木図書館短歌会)
開催期日:令和7年11月3日(月)午前10時
会場:裾野市民文化センター南側 牧水歌碑前
参加者:金子安夫
- 第30回 若山牧水賞授賞式(主催:宮崎県、宮崎県教育委員会、
宮崎日日新聞社、延岡市、日向市)
日時:令和8年1月29日(木)午後3時
会場:授賞式 宮崎市 宮崎観光ホテル
- 第92回 延岡市の「牧水歌碑祭」へ祝電(主催:若山牧水延岡顕彰会)
日時:令和8年3月15日(日)正午
会場:延岡市 城山公園内 牧水歌碑広場

2 第72回沼津牧水祭の運営

- 短歌大会
日時:令和7年10月5日(日)午前10時30分～午後4時30分
会場:沼津市立図書館 視聴覚ホール
講師:大辻隆弘先生(「未来」編集発行人、宮中歌会始選者、
第29回若山牧水賞受賞者)
応募短歌:109首
参加者:67人
- 碑前祭・芝酒盛
日時:令和7年10月19日(日)午前11時～午後2時
会場:千本浜公園 牧水歌碑前
参加者:450人

3 特別企画展「林茂樹回顧展」沼津市若山牧水記念館の軌跡

日時:令和8年1月14日(水)～2月15日(日)
会場:沼津市若山牧水記念館ラウンジ
参加者:429人

4 文学講演会及び文学講座等の開催

- 第38回「雛の歌会」
日時:令和8年2月28日(土) 午後1時30分～3時45分
会場:沼津市若山牧水記念館ラウンジ
講師:江戸 雪氏(「西瓜」所属)
応募短歌:82首
参加者:53人
- 初心者のための短歌講座
日時:令和7年4月～令和8年2月
毎月第2土曜日 午前10時～12時
会場:沼津市若山牧水記念館会議室
講師:永久保英敏氏 ほか
参加者:10回開催 延べ113人
- 牧水記念館短歌会
日時:令和7年4月～令和8年2月
毎月第2土曜日 午後1時～3時
会場:沼津市若山牧水記念館会議室
講師:永久保英敏氏 ほか
参加者:10回開催 延べ100人
- 書道講座
日時:令和7年4月～令和8年3月
毎月第3火曜日 午後1時～2時
会場:沼津市若山牧水記念館会議室
講師:成田真洞先生
参加者:10回開催 延べ79人
・令和7年度「書道講座」受講者作品展示
期日:令和8年3月3日(火)～令和8年3月22日(日)
会場:沼津市若山牧水記念館ラウンジ
入場者:236人
- 第36回「中学生短歌コンクール」募集・表彰
募集期間:令和7年5月1日(木)～令和7年7月31日(木)
応募短歌:1,355首(19校 1,355人)
入選短歌:特選10首、入選40首
選者:永久保英敏、河本尚子、湯山昌樹、勝俣文子
表彰:令和7年10月19日(日)「第72回沼津牧水祭・碑前祭」にて
- 音楽イベント
第1回 古楽コンサートシリーズ42
ソプラノ、フルート、チェンバロの夕べ
日時:令和7年11月16日(日)午後6時45分
会場:沼津市若山牧水記念館ラウンジ
出演:小見山 香乃(ソプラノ)、杉山 和香葉(ソプラノ)
大島 萌(フルート)、杉山佳代(チェンバロ)
来場者:36人
第2回 義太夫節演奏会「一谷嫩軍記」組討の段
日時:令和7年11月23日(日)午後7時
会場:沼津市若山牧水記念館ラウンジ
出演:竹本千香(太夫)、鶴澤洋賀花(三味線方)
来場者:23人

公益社団法人沼津牧水会定款（抜粋）

- 第一条 この法人は、公益社団法人沼津牧水会と称する。
- 第二条 この法人は、主たる事務所を静岡県沼津市千本郷林一九〇七番地の二に置く。
- 第三条 この法人は、歌人若山牧水を顕彰し、文学的業績の研究を深め、短詩型文学の普及を図り、もって、教育文化の振興に寄与することを目的とする。
- 第四条 この法人は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。
- (1) 歌人若山牧水に関する調査研究
- (2) 沼津牧水祭（短歌大会及び碑前祭）の運営
- (3) 文学講演会、文学講座等の開催
- (4) 沼津市若山牧水記念館の管理運営の受託
- (5) その他この法人の目的を達成するために必要な事業
- 第五条 この法人に次の会員を置く。
- (1) 正会員 この法人の目的に賛同して入会した個人又は団体
- (2) 賛助会員 この法人の事業を援助する個人又は団体
- (3) 名誉会員 この法人に特に功労のあつた者で、会員総会の決議をもって推薦されたもの
- 第六条 前項の会員をもって、一般社団法人及び一般財団法人に関する法律上の社員とする。
- この法人の会員にならうとするものは、入会申込書を理事長に提出し、理事会の承認を受けなければならない。ただし、名誉会員に推薦された者は、入会の手続を要せず、本人の承諾をもって会員となるものとする。
- この法人の事業活動に経常的に生じる費用に充てるため、会員になった時及び毎年、会員は、会員総会において別に定める額を支払う義務を負う。
- 第七条
- ### 公益社団法人沼津牧水会入会金及び会費規程
- 第一条 この規程は、公益社団法人沼津牧水会定款第七条に基づき、入会金及び会費について定めることを目的とする。
- 第二条 定款第七条第一項に規定する入会金は、次のとおりとする。
- (1) 正会員 一〇、〇〇〇円
- (2) 賛助会員 三〇、〇〇〇円以上
- 第三条 定款第七条第一項に規定する会費は、次のとおりとする。
- (1) 正会員 五、〇〇〇円（年額）
- (2) 賛助会員 一〇、〇〇〇円以上（年額）
- | |
|------------------------------|
| （理事長）金子 安夫（副理事長）河辺龍二郎 永久保英敏 |
| （理事）河本 尚子 飛澤浩四郎 湯山 昌樹 水田 真道 |
| （監事）西家 孝 齋藤 貴英 |
| （事務局）大島 葉子 納谷 瑞穂 市川 悦子 八木久美子 |

編集後記

今年度の日本は、政治も暮らしもスポーツも話題が尽きない一年でした。初の女性首相による高市内閣がスタートし、防衛や子育て支援、経済対策が次々と打ち出されました。秋の衆議院総選挙では「物価高どうする？」が大きなテーマに。食品や電気・ガス代の値上がりで家計はなかなか大変、節約ワードがあちこちで聞かれました。一方で大阪・関西万博は最新技術や海外パビリオンが話題になり、会場は連日大にぎわい。そしてイタリアで行われたミラノ・ユルティナ冬季オリンピックでは日本人選手が活躍し、明るいニュースもたくさん届きました。期待と不安が入り混じりながらも、前に進んだ一年でした。

特別企画展「林茂樹回顧展―沼津市若山牧水記念館の軌跡―」では、記念館のあゆみを振り返りながら、新聞記事や写真、当時の記録などを展示しました。資料をたどると、長期に亘り沼津牧水会理事長を務めた林茂樹前理事長が記念館の設立や運営にどれだけ尽力されたのか、また、牧水を顕彰する人々の思いの積み重ねを感じていただけたのではないのでしょうか。資料の一つ一つが、記念館の歴史を静かに語ってくれました。これからも牧水の魅力を、多くの方々に伝えていきたいと思えます。企画展開催に併せて長澤靖夫会員に林前理事長との思い出の記を執筆していただきました。

沼津牧水祭「短歌大会」には大辻隆弘先生を、「離の歌会」には江戸雪先生をお迎えし、それぞれ充実した歌会となりました。「沼津牧水祭 碑前祭・芝酒盛」は、会場に多くの方々が集い、盛会裡に催すことができました。「短歌講座」「短歌会」「書道講座」及び「サロン音楽の夕べ」や初の試み「義太夫節演奏会」も好評でした。

これからも皆さまに楽しんでいただけるイベントを開催していきたいと思っております。奮ってご参加いただける事をお待ちしております。

本年度も変わらぬご支援をお願い申し上げます。